

人間の在り方へ根源の問い 「素劇・檜山節考」

「劇団1980」ルーマニア公演に同行して

寄稿

小林 恭二 文学部教授

シビウなど2都市で

6月中旬、国際交流基金の招待で劇団1980のヨーロッパ公演に同行した。ヨーロッパ公演はパリ公演を皮切りにルーマニアのシビウ国際演劇祭参加、その後ルーマニアの首都であるブカレストで最終公演と続くのだが、わたしは日程の都合でシビウ以降の参加となった。

劇団1980というのは、映画監督の故今村昌平氏の教え子を中心となって立ち上げた劇団で、映画人にも近い。今回の公演演目は「素劇・檜山節考」。深沢七郎の『檜山節考』の舞台化である。原作は日本で著名だが、今村監督が映画化し、これが1983年カンヌ国際映画祭パルムドール(最高賞)を受賞したため、世界的にも有名である。

ルーマニアといわれて何を思い出すだろうか。有名なのはドラキュラ伝説。実際、わたしもルーマニアに行く前はドラキュラ映画でおなじみのお

どろおどろしい風景を思い浮かべていた。しかし現在のルーマニアはよく整備された農業国家で、バスで移動する限り、ドラキュラ的な底暗さは微塵も見えない。

ただそれでもブカレスト空港からシビウに向かう途中の山中で、ロマの踊り子を見かけたときは異様な印象を受けた。ロマというのはかつてジプシーと呼ばれた放浪の民族で、主として芸能を生業としている。ヨーロッパ各国で差別の対象となってきた。それでも現在は定住率が上がっており、一部の犯罪集団を除けば近代市民の暮らしに溶け込んでいると聞いていた。

しかしルーマニア山中で見たロマの踊り子たちは、誤解

普通に見えていた山野に異様な生気が吹き込まれたように思えた。彼らがそこにいるだけで、そこはすでに舞台であった。

ボランテティア活躍

シビウは長い渓谷を抜けた先にある美しい町である。街並みには濃く中世が残っている。到着したのは8日の夜11時過ぎのことである。この時期ヨーロッパは昼が長い。9時くらいまではごく普通に明るく、10時を過ぎてもしばらくは暮れずんでいる。だがさすがに11時になると夜らしくなる。シビウは観光都市でもあるが、この日は町中に美しい篝火を焚いて旅人を迎えていた。ホテルに到着すると二人の若い日本人女性が待って

満員の観客 立ち上がり熱烈な拍手

を恐れずにいえば全身から妖気でもいいたいものを漂わせており、彼らは踊りながら歩いていくだけで、これまで

いた。深夜の到着だというのが嫌な顔ひとつせず長旅をねぎらってくれた。部屋の手配やスケジュールの説明などを

てきぱきとこなしている。その手慣れた様子に現地でも驚かされた。人間、責任を持たされると変わるのだ。

前にシビウ入りしたばかりのボランテティアと聞いてとても驚かされた。人間、責任を持たされると変わるのだ。

シビウでいくつかの芝居を観たり、インタビューを受けた後、いよいよ「素劇 檜山節考」の招待公演が行われた。町外れの劇場で、なおかつ夜10時開演という条件だったにもかかわらず、客の入りは超満員だった。しかも各国のボランテティアたちが口コミで集まり、通路もボランテティアを首から下げた若者で埋め尽くされた。

シビウでいくつもの芝居を観たり、インタビューを受けた後、いよいよ「素劇 檜山節考」の招待公演が行われた。町外れの劇場で、なおかつ夜10時開演という条件だったにもかかわらず、客の入りは超満員だった。しかも各国のボランテティアたちが口コミで集まり、通路もボランテティアを首から下げた若者で埋め尽くされた。

その2日後、劇団は最終公演地であるブカレストに向かった。パリのオペラ座を模したオデオン劇場という美しい劇場で行われた最終公演もまた大成功だった。



大使館主催のレセプションに参加した小林教授、劇団1980代表の柴田義之さん、石井喜三郎大使ご夫妻(左から)＝ブカレスト



レセプションで少女役の関根麻帆さん(左)と主役おりん婆さんを演じた水井ちあきさん

る会場があり、終夜演劇関係者やボランテティアたちでにぎわう。彼らにとってそれは生涯の思い出になるはずである。おそらく東京オリムピックでもこうした光景が見られるだろう。興味ある学生諸君は語学を磨いてこうしたボランテティアに参加するのもいいかもしれない。

述べた。舞台となるのは信州の寒村。この村では七十になる老人は食糧難から逃れるために自ら命を絶つ風習がある。これを村では「山行き」と称している。いわゆる「姥捨て」だが、長野県人の名譽のためにいうならこれはあくまで小説上の設定で、そうした風習は長野にはない。しかし飢饉の年には似たような悲劇はあったはずで、決して作家の妄想とはいえない。寒村の極度の貧困を通して描かれるのは、意外なことに人間の在り方に対する根源的な問いと、死と自然が渾然一体となった荘厳な美だった。

シビウでも観劇した駐ルーマニア全権大使夫妻はまたも劇場に現れ、そればかりか劇団員の労をねぎらうレセプションを主催してくれた。そこには大使のみならず参事官夫妻やブカレスト在住の演劇人が集まり、きわめて豪華な雰囲気となった。もっとも団員のほとんどは舞台上そのままの劇場ボールルームにいきなりの信州の寒村の住人が舞い降りたような不思議な光景となった。和やかな雰囲気には包まれた。

題材は非人間的風習

『檜山節考』について多少説明する。本作は深沢七郎原作の小説であることはずで

（こぼやし・きょうじ）作家。専修大学文学部教授。1957年兵庫県生まれ。東京大学文学部卒。84年『電話男』（海燕新人文芸賞）でデビュー。『カブキの日』で三島由紀夫賞。ほかに『宇田川心中』『俳句という遊び』など。

別のものである。まして今回の公演は映画版のカンヌ受賞から30年余が経過しており、観客の代替わりも進んでいる。シビウの観客が本作にどのような評価を下すか、関係者は固唾をのんで見守った。しかし結果は大成功だった。芝居が終わった瞬間、観客たちはバネ仕掛けの人形のように立ち上がり、熱烈な拍手を送り続けた。その中にはヨーロッパの著名な演劇評論家や駐ルーマニア全権大使夫妻の姿もあった。彼らは終演後も興奮さめやらぬように、劇場ロビーのあちこちで劇の感想を述べ合っていた。

豪華レセプション



最終公演を行ったブカレストのオデオン劇場